

## 第90回日本小児科学会茨城地方会

会長 小宅 泰郎（北茨城市立総合病院）

期日 平成20年11月2日（日）

会場 茨城県立こども病院（水戸市）

### 1. 新生児バセドウ病の2例

筑波大学小児科

竹内 秀輔、岩淵 敦、嘉本 寛江、篠原 宏行、石川 伸行、西村 一記、雪竹 義也、齋藤 誠、高橋 実穂、宮園 弥生、鴨田 知博、須磨崎 亮

バセドウ病母体から出生した新生児バセドウ病の2例を報告する。1例目は日齢9からPTU投与を行い、甲状腺機能は正常化した。投薬中止後、日齢25に機能亢進に転じ、再開を要した。2例目は出生直後に機能低下のため1-T4補充を要した。日齢19から亢進に転じMMI及び大量ヨード療法で正常化した。新生児バセドウ病は甲状腺機能の変動に応じた投薬量の調節が必要と考えられ、文献的考察を交えて報告する。

### 2. ミノルタ黄疸計（JM-103）を用いた新生児黄疸の評価

総合病院土浦協同病院新生児集中治療科

石渡 久子、金井 慎一、能勢 統一郎、齋藤 可奈、榎本 啓典、朝田 五郎、清水 純一

コニカミノルタ社の黄疸計（JM-103）は新生児に侵襲を加えることなく血清 T-Bil 相当値を測定でき、産科領域で汎用されている。私たちは JM-103 の測定値と実際の血清 T-Bil 値の相関について検討した。これまで新生児黄疸に対する出生早期の光線療法開始基準を独自に設けてきたが、今回さらに JM-103 測定値による新たな採血基準を作成し、早発黄疸のスクリーニングに有用であると考えられたので報告する。

### 3. 新生児の微小な頭蓋内出血病変の検出における SWI の有用性

茨城県立こども病院新生児科<sup>1)</sup>、同放射線科<sup>2)</sup>

毛利 陽子<sup>1)</sup>、金井 雄<sup>1)</sup>、雪竹 義也<sup>1)</sup>、新井 順一<sup>1)</sup>、宮本 泰行<sup>1)</sup>、河野 達夫<sup>2)</sup>

頭部 MRI 検査において、磁化率強調画像（susceptibility weighted imaging: SWI）はデオキシヘモグロビン、細胞内メトヘモグロビンなどを鋭敏に検出する。主に成人の頭蓋内の出血性病変、静脈病変の評価に利用されているが、小児領域への応用も広がりつつある。新生児の頭部 MRI 検査においても、微小な出血性病変の検出に有用であったことを報告する。

### 4. 多発性骨折を契機に見つかった拡張型心筋症の一例

土浦協同病院小児科<sup>1)</sup>、川口市立医療センター新生児科<sup>2)</sup>

細川 奨<sup>1)</sup>、石黒 利佳<sup>2)</sup>、黒澤 信行<sup>1)</sup>、渡辺 章充<sup>1)</sup>、渡部 誠一<sup>1)</sup>

1歳2ヶ月の男児。在胎28週5日、体重968gで出生。生後6ヶ月時に多発性骨折から虐待を疑われ入院した際、胸部X線で心拡大、肺うっ血を、心電図で胸部誘導V5-6の陰性T波、左室肥大所見を認め、心エコーで拡張型心筋症と診断。抗心不全治療(利尿剤、血管拡張剤)を開始したが改善に乏しく、 $\beta$ 遮断薬を併用し著明に改善した(LVEF21→60%、BNP 222→14.7pg/ml)。文献的考察をふまえ報告する。

## 5. 小児期に著明な大動脈基部拡張症を伴い Bentall 手術を行った Loey's-Dietz 症候群の一例

筑波大学小児科<sup>1)</sup>、同心臓血管外科<sup>2)</sup>、横浜市立大学大学院医学研究科環境分子医科学<sup>3)</sup>  
福島 紘子<sup>1)</sup>、金井 雄<sup>1)</sup>、岩崎 陽子<sup>1)</sup>、加藤 愛章<sup>1)</sup>、高橋 実穂<sup>1)</sup>、堀米 仁志<sup>1)</sup>、  
須磨崎 亮<sup>1)</sup>、金子 佳永<sup>2)</sup>、徳永 千穂<sup>2)</sup>、金本 真也<sup>2)</sup>、平松 祐司<sup>2)</sup>、松本 直通<sup>3)</sup>

3か月の女児。先天外反足を主訴に紹介された。くも状指などの Marfan 症候群の症状に加え、口蓋垂裂、眼間開離などを認め、心エコーで大動脈基部拡張を指摘された。遺伝子検査で TGF $\beta$ R2 の変異が認められ Loey's-Dietz 症候群(LDS)が確定した。大動脈基部拡張の進行は早く、10歳時には43mmに達したため Bentall 手術を施行した。LDSは Marfan 類似症状を示すが若年期に致死的大動脈解離を起こす可能性があり、小児科医が認識すべき疾患と考えられた。

## 6. 手術適応となった心房中隔欠損症の診断契機についての検討

茨城県立こども病院小児科<sup>1)</sup>、同心臓血管外科<sup>2)</sup>  
塩野 淳子<sup>1)</sup>、菊地 斉<sup>1)</sup>、村上 卓<sup>1)</sup>、小池 和俊<sup>1)</sup>、土田 昌宏<sup>1)</sup>、坂 有希子<sup>2)</sup>、五味 聖吾<sup>2)</sup>、阿部 正一<sup>2)</sup>

当院で手術を施行された心房中隔欠損症(ASD)症例の診断契機について検討した。1998年から2008年6月のASD手術例は94例(手術時年齢3か月~18歳)であった。診断時年齢は0か月から15歳で、44例(46.8%)が0歳台で診断されていたが、29例(30.9%)は6歳以降であった。診断契機は全体では心雑音が64例(68.1%)で最も多かったが、6歳以降では心電図異常の割合が多く、29例中19例(65.5%)であった。

## 7. 緑膿菌による壊死性筋膜炎で死亡した急性リンパ性白血病の女児例

茨城県立こども病院小児科<sup>1)</sup>、水戸済生会総合病院整形外科<sup>2)</sup>  
小池 和俊<sup>1)</sup>、櫻井 彩子<sup>1)</sup>、小林 千恵<sup>1)</sup>、加藤 啓輔<sup>1)</sup>、土田 昌宏<sup>1)</sup>、生澤 義輔<sup>2)</sup>

B-pre ALL13歳女児。寛解導入(L07-1602;HR)治療中、白血球 $<100/\mu\text{l}$ のDay39朝発熱、右下腿痛が出現し抗生剤を開始したが、夕方に血圧低下。Day40 ARDS進行。人工呼吸器装着し顆粒球輸血、サイトカイン吸着を施行。Day42午前1時右鼠径部の紅斑(6cm)、小水疱疹が、3時大水疱(5cm)に進行。壊死性筋膜炎の診断で11時右股関節離断術を施行したが22時永眠。水疱、切除組織から緑膿菌が検出された。

## 8. 簡易測定キット「ブラームス PCT-Q」を用いたプロカルシトニン測定の有用性について

## での検討

茨城県立こども病院小児科<sup>1)</sup>、同臨床検査科<sup>2)</sup>

後藤 昌英<sup>1)</sup>、本山 景一<sup>1)</sup>、泉 維昌<sup>1)</sup>、櫻井 彩子<sup>1)</sup>、菊地 斉<sup>1)</sup>、柳瀬 健太郎<sup>1)</sup>、小林 千恵<sup>1)</sup>、村上 卓<sup>1)</sup>、加藤 啓輔<sup>1)</sup>、塩野 淳子<sup>1)</sup>、小池 和俊<sup>1)</sup>、土田 昌宏<sup>1)</sup>、田崎 美樹<sup>2)</sup>

プロカルシトニン(PCT)は、細菌感染症診断及び重症度判定の有用なマーカーとされる。簡易測定キットを用い20例でPCTを測定し、単独評価あるいは白血球数やCRP値と併用しての評価を比較検討した。PCT単独評価では特異度と陽性予測率が100%と極めて高く細菌感染症の早期かつ特異的なマーカーになりうること、白血球数とCRPとの併用評価では特異度を下げずに感度を上げることが示唆された。今後、多数例でPCT測定を行い、前方視的に同様の検討を行う予定である。

## 9. つくば市内の保育所、保育園における食物アレルギー児の頻度とその対応について

筑波メディカルセンター病院小児科

宇内 景、野末 裕紀、今井 博則、齊藤 久子、青木 健、市川 邦男

つくば市役所保健福祉部こども課の協力を得て、つくば市立保育所および認可保育園36か所に対し、食物アレルギーの実態とその対応についてアンケート調査を行った(回答33)。食物アレルギーの頻度は3%、原因食物として多いものは卵、牛乳、ピーナッツ、小麦の順であった。全て自施設内で調理を行っており、29施設で何らかの除去食対応を行っていた。しかし、対応に苦慮している施設も多く、今後の課題についてまとめる。

## 10. 治療方針の検討のために内視鏡検査を施行したアレルギー性紫斑病の1例

北茨城市立総合病院小児科<sup>1)</sup>、たかはし小児科医院<sup>2)</sup>

小宅 泰郎<sup>1)</sup>、平木 彰佳<sup>1)</sup>、小野 健太郎<sup>1)</sup>、高橋 偉久<sup>2)</sup>

アレルギー性紫斑病は一般病院でもしばしば経験する疾患であるが、急性期の強い腹痛の管理には苦慮することも多い。今回我々は治療法の検討のために上部消化管内視鏡検査を行った9歳女児のアレルギー性紫斑病の一例を経験した。内視鏡検査では胃体部~十二指腸球部全体に炎症を認め、ステロイドにて臨床症状の改善を認めた。本疾患における内視鏡検査の適応、内視鏡所見および治療法につき文献的考察を加えて報告する。

## 11. 保存的治療で軽快した上腸間膜動脈症候群の1例

日立製作所水戸総合病院小児科

穂坂 翔、吉田 尊雅、小宅 奈津子、森山 伸子、永井 庸次

症例は8歳女児。絶食、輸液療法で改善しない嘔吐と腹痛が持続した。腹部レントゲン所見でdouble bubble signが認められ、腹部CT、上部消化管造影所見より上腸間膜動脈症候群と診断した。1年2ヶ月で6kgの体重減少がみられていたが、原因となる基礎疾患や心理的要因は認められなかった。胃内減圧、体位指導により症状は改善し体重も増加した。文献的考察を加え報告する。

## 1 2. ロタウイルス関連急性膵炎の乳児例

常陸大宮済生会病院小児科<sup>1)</sup>、大曾根内科小児科医院<sup>2)</sup>

熊谷 秀規<sup>1)</sup>、松本 静子<sup>1)</sup>、江橋 正浩<sup>1)</sup>、大曾根 卓<sup>2)</sup>

ロタウイルス (RV) 関連膵炎はまれである。【症例】7 ヶ月の乳児。2 日前からの嘔吐下痢による脱水症のため搬送された。便 RV 陽性、血清アミラーゼ (Amy)、リパーゼ、膵ホスホリパーゼ A2 が高値を示した。輸液により翌日には脱水が改善したが、Amy は上昇したため腹部 CT を施行した。その結果膵腫大を認め膵炎と診断した。特異的な治療なしに軽快、膵腫大も消失した。【結語】乳児の RV 胃腸炎で Amy が高値の場合は、リパーゼ測定や画像診断を検討する。

## 1 3. 当科における腎盂形成術の変遷

筑波大学小児外科

瓜田 泰久、小室 広昭、堀 哲夫、楯川 幸弘、工藤 寿美、藤代 準、星野 論子、神保 教広、金子 道夫

先天性水腎症のうち、最も頻度の高い腎盂尿管移行部狭窄 (本症) の根治術は腎盂形成術が行われるが、従来は吻合部の負荷の軽減目的に腎瘻造設を同時に行っていた。我々はいかねてより本症の手術を行ってきたが、近年、術中尿管ダブル-Jカテーテル留置のみで良好な経過を得ている。カテーテル留置は後に抜去を必要とするが、術後安静度の軽減、入院期間短縮など利点が多い。当科における腎盂形成術の変遷と比較を報告する。

## 1 4. 膀胱尿管逆流手術における低侵襲・入院期間短縮に向けての工夫

茨城県立こども病院小児泌尿器科<sup>1)</sup>、同小児外科<sup>2)</sup>

矢内俊裕<sup>1)2)</sup>、川上 肇<sup>2)</sup>、平井 みさ子<sup>2)</sup>、連 利博<sup>2)</sup>

我々は膀胱尿管逆流手術において、より低侵襲で入院期間の短縮を目指した次のような工夫をしている。①創の縮小、②開創器の変更 (Denis-Brown→Alexis:XS)、③最小限の尿管剥離と尿管血流の温存、④原則として尿管形成・尿管ステント留置なし、⑤膀胱前・皮下ドレーン留置なし、⑥術後抑制帯の使用軽減、⑦尿道留置バルーンカテーテルの早期抜去などにより、術後入院期間の短縮 (14 日→5 日) が得られた。

## 1 5. 巨大膀胱結石を主訴に診断されたシスチン尿症の 1 症例

筑波大学小児外科

神保 教広、楯川 幸弘、堀 哲夫、小室 広昭、工藤 寿美、瓜田 泰久、藤代 準、星野 論子、金子 道夫

患児は 2 歳女児。腹痛、下痢、熱発にて近医を受診した。腹部レントゲン写真にて骨盤内に 3 cm 大の膀胱結石が疑われ、尿路感染も認められたために入院となった。手術は、恥骨上小切開にて、膀胱切石術を施行した。結石の大きさは、3cm x 2.5cm x 2.0cm であった。一部粉碎した結石培養にて、Proteus vulgaris, Enterococcus avium が、術中尿道カテーテル

からの尿培養では、Enterococcus avium が検出された。結石分析にて 98%以上が L. シスチンと判明し、シスチン尿症の診断となった。

## 1 6. 腹部膨満から診断に至った糖原病Ⅷ型の 1 例

日立製作所日立総合病院小児科

森山 剣光、奥田 洋一、伏木 亜希、諏訪部 徳芳、村長 靖、菊地 正広

患児は 2 歳 7 ヶ月男児。近医で腹部膨満、肝腫大(肋骨弓下 7cm)を指摘され当院小児科受診。低身長、血液検査で肝逸脱酵素の上昇、乳酸・ピルビン酸の上昇を認めた。腹部エコーならびに腹部単純 CT から特徴的所見を認め、肝型糖原病が考えられた。Fernandes 負荷試験より糖原病Ⅷ型が疑われ、赤血球酵素診断で phosphorylase b kinase の酵素活性低値を認め、確定診断となった。

## 1 7. CHARGE 症候群の 2 例

土浦協同病院新生児科<sup>1)</sup>、茨城県立こども病院小児外科<sup>2)</sup>、神奈川県立こども医療センター遺伝科<sup>3)</sup>

能勢 統一郎<sup>1)</sup>、榎並 彩子<sup>1)</sup>、金井 慎一<sup>1)</sup>、石渡 久子<sup>1)</sup>、斎藤 加奈<sup>1)</sup>、榎本 啓典<sup>1)</sup>、朝田 五郎<sup>1)</sup>、清水 純一<sup>1)</sup>、平井 みさ子<sup>2)</sup>、黒澤 健司<sup>3)</sup>

症例 1: 在胎 38 週 0 日、2784g で出生した男児。出生直後からの喉頭軟化症に対し日齢 48 に気管切開を施行した。網脈絡膜欠損・虹彩欠損、右側大動脈弓、後鼻腔狭窄、小陰茎、感音性難聴を認めた。症例 2: 在胎 37 週 3 日、2835g で出生した男児。動脈管開存症に対し日齢 8 に外科的結紮術を施行した。網脈絡膜欠損、喉頭軟化症、嘔声・嚥下障害、小陰茎、感音性難聴を認めた。診断及び経過を、文献的考察を加え報告する。

## 1 8. 児童相談所におけるペアレントトレーニング

土浦児童相談所<sup>1)</sup>、筑波メディカルセンター病院小児科<sup>2)</sup>

齊藤 久子<sup>1)2)</sup>、半田 光代<sup>1)</sup>、木村 千鶴<sup>1)</sup>、大江 陽子<sup>1)</sup>、及川 牧子<sup>1)</sup>、市川 邦男<sup>2)</sup>、斎藤 一男<sup>1)</sup>、岡野 典子<sup>1)</sup>

土浦児童相談所で 2004 年からペアレントトレーニングを 6 回行った。対象は子どもの対応に苦慮している親(祖母を含む) 27 人。多くの親が子どもを客観的に、肯定的に捉えることが出来るようになり、子どもへの対応に変化が見られた。また、参加者間で連帯感が生まれ孤立感が減じ自信が持てるようになった。親の対応は他児に対しても変化し、子どもの行動の変化も家庭のみでなく学校においても生じるなど汎化が見られた例もあった。

## 1 9. 学童期の高機能広汎性発達障害児の学校への適応と多賀総合病院における言語・コミュニケーション支援の現状

日立製作所多賀総合病院リハビリテーション科<sup>1)</sup>、同小児科<sup>2)</sup>、日立製作所水戸総合病院小児科<sup>3)</sup>

鬼越 美帆<sup>1)</sup>、大谷内 秀子<sup>1)</sup>、沼田 世里<sup>1)</sup>、森山 伸子<sup>2) 3)</sup>

当院通院中の高機能広汎性発達障害児 26 例について学校への適応、二次障害の有無を検討した。「集団生活での不適応」が 21 例 (80.8%)、「学業不振」が 10 例 (38.5%) に認められた。不登校などの二次障害に対する心理的支援を 4 例で必要とした。リハビリテーションの視点から適切な対応の仕方や教育場面へのアドバイスなど当院の支援の現状および今後の課題について検討する。

## 20. 当院におけるけいれん重積発作 102 例の臨床的検討

取手協同病院小児科

鈴木 智典、前田 佳真、松本 暁子、松原 洋平、寺内 真理子、鈴木 奈都子、太田 正康

痙攣は小児科医が日常的に数多く遭遇する症候である。中でも痙攣重積は、急性脳症、てんかんなどの重症疾患を背景とすることが多く、生命予後にも関わるため、迅速な診断及び治療の開始が必要とされる。我々は、当院において 2007 年 4 月 1 日から 2008 年 7 月 31 日の期間に経験した、痙攣が 30 分以上持続した 102 症例 (男:57, 女:45) について、年齢、原疾患、持続時間、治療、予後などの観点から後方視的に比較検討を行った。また、急性脳症 6 例について質的検討を加えた。